

II - 27

近世期秋田藩鷹巣村文書「永年記」に示された洪水記録について

秋田大学鉱山学部 正会員 堀野 一男

1. はじめに

米代川は流域面積(4,099km²)でみても東北地方で5番目、全国的にみても14番目に大きな河川となっている。流域の大部分は秋田県北部地域であり、幹川流路延長は136.3kmである。河川中流部から下流部にかけて、鷹巣盆地を挟むようにそれぞれ狭窄部があって、これが米代川の洪水に大きな影響を与えてきた。藩政期に鷹巣村の肝煎で成田兵右衛門という人が書き残した記録集に「永年記」¹⁾というものがある。これは、元和期(1615-24)から弘化期(1844-48)までに起きた様々な出来事、とくに多くは天候と農作業の経過を記述したものを順不同に綴っている。しかし、農事は気象環境と極めて密接な関わりをもつものであり、そのため災害についての記述もいたるところで見られる。

本報告では災害記録に示された災害対応の特徴的な点と、気候も含めた自然環境の把握が大変重要な課題として位置づけられていた点などについて述べる。

2. 「永年記」にみる水災害記録について

「永年記」にはたとえば、「寛永元申子年(1624)飢饉大凶作田畑共に式割の作なりと言」というような飢饉について記録したものや、他多くは「天保元庚寅年(1830)閏三なり 田打三廿一日より種時閏三月十二より田植四月廿七日より(略)田畑の豊凶ハ春秋の季候に抱らず偏に夏の順季に預るものなり 年内寒過雪沢山降りて正月になれば近年中の大雪なり 去丑当寅兩年とも寒過て雪降り近年中大雪斗り也」というように、天候と農作業の経過を記述したものが多い。しかし農事は気象環境と極めて密接な関わりをもつものであり、そのため災害についての記述もいたるところで見られる。「正保元甲申年(1644)九月十八日秋田地震地裂けて水湧ク」というような記録もあり、近年「地震と流砂現象」との関連が「災害学」上も注目されてきているが、災害史研究という視点からも貴重な記録であると思われる。

「永年記」には「御支配蓮沼様日記より写如斯」とか「秋山喜右衛門日記に有之由」、また「右の通比内の古実書にあり」というような記述が随所に見られることから、これは日記をはじめとした様々な資料から貴重な記録を抜き出してまとめあげたものであり、貴重な史的文献でもある。それから、冒頭「御支配蓮沼様より奉承知候丸印」とあることから、記述にあたっては当時の藩庁から認可を受けて行われたことを示している。

その他の洪水災害では興味深い記述もある。

「天保四癸巳年(1833) (略) 六月五日六日の大洪水にて村々大破也 寛政十年年大洪水より文化十四丑年(1817)大洪水は三尺位不足のよし 又此度大洪水は右午年大洪水より五尺位不足と一統申事也 何れ六月中雨天にて単物着日四五日ならて無之為夫か節後れ出穂一円無之又凶作也と一統唱ひ湊え処々より米買人入込候(略)」

災害の記録はあくまでも「為夫か節後れ出穂一円無之又凶作也」というように、稲作にとつての気象環境がどうであったかが中心である。しかしこの事は逆に、この頃の農耕にとって、気候も含めた自然環境の把握が大変重要な課題であったことを示しているのではないだろうか。つまり「寛政十年年大洪水より文化十四丑年大洪水は三尺位不足」「此度大洪水は右午年大洪水より五尺位不足」と水位の記述はかなりの具体的であることから、一定の観測体制も含め対応がなされていたものと考えられる。

また、「永年記」には弘化三年(1846)の六月梅雨期洪水についてかなり詳細に記述されている。洪水記録は耕作状況の推移を綴った年間記録の一部として記述されているが、この洪水記録の箇所は大変長いもので、ここではその一部を紹介する。

「弘化三丙午年(1846) (略) 六月の節十四日なるに五日朝より入梅雨の処七ツ時より暮六ツ時過迄大雨降り此夜中共南大風雨なり六日になりて洪水南大風雨少しも止まぬなり昼四ツ時より大洪水になり小沼の

土手切られ狐谷より家下タ迄水碓りて大河式筋になる家下タと三筋の大河なり 綴子川は与惣左エ門三四郎家下タ迄水碓るなり又坊沢当村両大水門へ村中の有人詰め漸々防きおふせたり 去々辰年洪水より水門前は水一尺程不足の由なれと船場下も莫太余計なりといふ是は小沼の土手切られ田面へ水引莫太に負へたる故なるべきや 扱七ツ時風西へ通り晴模様になれば日暮て大河水三尺程落ちたるよし届あり(略) 扱村後口綴子川大水にて当六日の洪水より四五尺も水高と申事なり(略) 又綴子沢此洪水にて百石余の田地石砂利に成たるよし御役屋詰様御見聞になる坊沢村も右川添三四捨石も同断のよし 然るに糠沢川前山川今泉川共左程の水高に無之よし綴子川斗大変なりといふ(略) 仰先年よりの洪水四度に三度は津軽御境より斗りなり去々辰年も此度も津軽御境よりの洪水にて小猿部川並阿仁の方杯常体の水高なり(略)」

季節は六月、梅雨期の豪雨で5日朝よりの「入梅雨」で「七ツ時」から「暮六ツ時過迄」の「大雨降り」であった。「七ツ時」は「江戸時代の不定時法と現代時刻との対照」²⁾を参考にすると、約午後の5時である。「暮六ツ時過迄」とあるから、やや午後8時に近かったのではないだろうか。約3時間の強い雨が降ったことになる。結局「此夜中共南大風雨なり」であったから、ほぼ1日中降り続け6日になって「昼四ツ時」、朝の9時頃には「大洪水になり小沼の土手切られ」る大きな被害を受けた。「家下タ迄水碓りて大河式筋になる家下タと三筋の大河なり」とあるが、「家下タ」は現在の鷹巣町字界資料³⁾によれば、鷹巣市街地区のちょうど西側地域に、字名で「下家下」「池中家下」「南中家下」と呼ばれる土地がある事から、もしここの地点と同一と考えるならば、現在の地理状況から納得のいくおおまかな説明が付けられる。

つまり、これらの地域は「大河式筋」となった米代川から、約500mから1.5kmの範囲に位置することから、「三筋の大河なり」の様に視界におさまったと考えられる。一般に都市部は開発が進められ、旧地域名が改められている場合が多いが、特に農村部などの場合は藩政期の地名がそのまま残っている場合が多いと思われる。まして、字名となるとその様な事例はさらに多くなるものと考えられる。

さて、鷹巣村の北部を綴子川が流下し西方で米代川で合流する。鷹巣村と坊沢村との境界ははっきりしないが、何れ「坊沢当村両大水門」という事から、この付近の綴子川に施工された水門であろう。「村中の有人詰め漸々防きおふせたり」と共同で水防作業にあたっている。

この洪水では「綴子沢此洪水にて百石余の田地石砂利に成たるよし御役屋詰様御見聞になる坊沢村も右川添三四捨石も同断のよし」と被害も甚大なものがあつたが、その後の分析が面白い。「小猿部川並阿仁の方杯常体の水高なり」という実態をとらえ、「綴子川斗大変なり」というのは津軽藩領、青森県境山地からの出水が原因という訳である。そして、「先年よりの洪水四度に三度は津軽御境より斗りなり去々辰年も此度も津軽御境よりの洪水」と決めつけている。

綴子川は地形図でみると大体のところ幹川距離が13から14kmくらいであり、標高400mから500mの山々の水を集め流下する急流の山地河川である。そのため、土石流の発生等も考えられ「百石余の田地石砂利に成たるよし」というような災害発生になったものと思われる。

蛇足的な見方をすれば、「永年記」の記録が洪水災害の源にふれて、「去々辰年も此度も」と強調し、「津軽御境よりの洪水」と決めつけているのは藩内住民意識のエゴイズムからくる身勝手な分析が憶測され興味深い。

3. おわりに

秋田藩鷹巣村の史料「永年記」に示された災害記録についてみてみた。そこでは、「寛政十年年大洪水より文化十四丑年大洪水は三尺位不足」というように具体的な水位記録がみられ、データとしての精度は別として、今後災害履歴の地域的な積み重ねというような視点から、重視していく必要があると思われる。

最後に本報告をまとめるにあたり、鷹巣町役場地域政策課のみなさんには資料の調査等大変御協力頂きました。ここに感謝の意を表します。

【参考文献】

- 1)『鷹巣町史 別巻資料編一』、秋田県鷹巣町、1986年、所収「永年記」 2) 金田一京助監修 金田一晴彦編：『新明解古語辞典』所収、三省堂、P1250、1978。 3)「字界地図2万5千分の1」、鷹巣町、1970頃作成